

## 北海道支部活動紹介 「第 41 回研究会」

### 北海道支部研究会担当理事

(北海道大学) 佐野雄三、(北海道立総合研究機構林産試験場) 伊藤洋一

#### はじめに

北海道支部では、毎年恒例の活動として研究発表会と研究会を実施している。このうち研究発表会は、例年 10 月下旬～11 月上旬の時期に行われている。1 年ごとに札幌、旭川で交互に開催することになっており、札幌で開催するときには日本森林学会（旧林学会）北海道支部の研究発表会と合同で実施している。一方の研究会は、年度開始間もない 5 月後半に開かれる総会とセットで行うことになっている。札幌または旭川で開催されることが多いが、テーマや内容によっては他の市町村で開催されることもある。

本年度（2010 年度）の研究会は、5 月 19 日（水）に岩見沢市およびその近隣にて行われた。「道産カラマツの資源事情と利用の現況」をテーマに掲げ、講演会と見学会を行った。北海道のカラマツ造林木に関しては、最近になって付加価値の高い建築材として使われるようになり需要が増していること、あるいはクリーンラーチの名で売り出し中のグイマツとの F1 品種のことなど、明るい話題を耳にするようになってきている。その一方で、皆伐後の植林が進まず、将来の枯渇が憂慮されるという旨の 30 分もの特番が NHK 北海道により報道されるなど、新たな問題も生じている。こうした何かと話題になっているカラマツの現況について、専門家による講演と現地見学により理解を深めようというのが、今回の研究会の趣旨である。

以下に、当支部活動の紹介として、このたびの第 41 回研究会について報告してみたい。

#### 講演会

午前中に開かれた総会に続き、昼休みを挟んで午後 1 時より、岩見沢駅前の岩見沢市コミュニティプラザの多目的ホールにて行われた。演題と講師は次の通りで、筆者の一人＝伊藤が司会を務めた（写真 1&2）。

「道産カラマツの資源事情（歴史、現況、将来展望）」

北海道立総合研究機構 林産試験場 来田和人 氏

「住宅建築におけるカラマツ利用の最新事情」

武部建設株式会社 武部英治 氏

「カラマツ大径材の製材と乾燥の品質について」

北海道立総合研究機構 林産試験場 大崎久司 氏

来田氏の講演では、まず北海道へのカラマツ導入の歴史に関する説明とともに、長野県のどこから導入されたのか、その出所を DNA 解析によって検討するという、ご自身が係わった最近の研究成果の紹介があった。続いて林木育種事業によるカラマツ改良の歴史と現況に移り、現在までの到達点として、カラマツを花粉親、グイマツを母樹として組み合わせた F1 が様々な面（幹曲がり、強度性能、野鼠害抵抗性）ですぐれていることが明らかになり、品種化に漕ぎつけたことが紹介された。ところが、グイマツに著しい豊凶があるため、現段階では F1 の種子を安定供給することができず、F1 種苗の普及が思うように進んでいない実状も紹介された。そして最後に、今後の育種事業の方向性として材質育種を進め、さらに川上と川下が連携して利用目的に応じた育林システムを確立していく必要があることを力説された。

武部氏の講演では、社業として手がけてきた多くの木造建築にカラマツを含め様々な道産材を使ってきた体験談が紹介された。数年前に間伐した社有林のカラマツが、一般には切り捨てられるような代物であったのだが、ちょっとした工夫で建築材としてうまく活用することができたという冒頭で披露された成功譚は印象深いものであった。無節で木目のまっすぐ通った木材ばかりが好まれるわけではなく、ユーザーの嗜好や価値観は多様で、アイデア次第でカラマツに限らず道産材の活用は可能であることを強調されていたが、鮮明な写真により具体的な施工例を示しながらのお話しには説得力があった。

大崎氏の講演では、北海道内において今後の供給増加が見込まれるカラマツ大径材を付加価値の高い建築材として有効利用するための、現在進行中の製材および乾燥に関する試験研究成果が紹介された。径級や木取りの仕方により歩留まりや製品価格がどのようになるのかについての検討結果、および乾燥による含水率変化や狂いの測定結果が示されるとともに、開発中の木取り試験における製材作業の動画が披露された。さらにクリアすべき課題は残るが、カラマツ大径材に対応した的確な製材システムの開発が進みつつあることが実感された。



写真1&2：講演会の様子。

## 見学会

講演会后、貸し切りバスにより移動し、道産カラマツを使った建物2棟を見学した。いずれも武部建設が施工した建物である。

1棟目の建物は岩見沢と札幌の間に位置する江別市の一般住宅で、柱や天井、床板、幅木などの内装に道産カラマツの無垢材がふんだんに使われていた(写真3)。家主は北海道庁で林務畑の仕事に従事している方である。応対して下さった奥様に尋ねたところ、ご主人は使命感なのか、好みなのかはわからないが、道産カラマツを使うことを迷いなく予め決めていたみたい、とのことであった。そして、住んでみて概ね満足しており、例えば入居当初は床板が軟らかく傷が付きやすいことに戸惑いがあったが、次第にそういうものと諦めるに到り、今では歩いたときの足裏の温感が心地よく、靴下を着用しているとその心地よさが薄れてもったいないので、屋内では素足で過ごすようにしているなど、カラマツ無垢材に大いに馴染んで気持ちよくお暮らしの様子も語って下さった。木質材料学的な評価にはさらに長く経過を見なければならないが、見たところ顕著なねじれや割れ、ヤニのしみ出しといった問題は出ていないようで、カラマツ造林木の無垢材を建築に使うための加工技術が着実に進歩していることが実感された。



写真3：一般住宅(江別市)での見学の様子。

2棟目の建物は、岩見沢市郊外の田園地帯にある(株)宝水ワイナリーの社屋である(写真4&5)。小樽で軍需工場に使われていた建物を7年前に解体、5年前に移築したもので、1つの棟内に醸造所、販売所、事務所を組み入れたつくりになっている。構造材は元からのカラマツ以外の古材を使っているが、外壁や内装に道産カラマツの無垢板や合板が多用されている。武部氏の解説を受けながら建物内外を一通り見た後、ここで醸造、販売しているワインの試飲サービスの提供を受け、希望者が気に入った銘柄を土産に購入するのを待って帰りのバスに乗り込んだ。



写真4&5：宝水ワイナリー見学の様子。

## おわりに

講演会の来場者は64名を数え、見学会には56名が参加した。講演会では、すぐ後に見学会を控えているため質疑応答の時間を十分に確保することができなかったが、木材生産畑の研究者、木材利用畑の研究者、建築の実務家を招いての3本立てのお話は、短時間ながら中身が濃いものであった。見学会では、建築材として道産カラマツが使われている現場を見て、ユーザーの生の声を聞くこともできた。カラマツの育林や利用は北海道支部にとって古くから懸案の話題であり、新鮮味には乏しかったかも知れない。しかしながら参加者には、資源事情や利用技術の現況と課題など、道産カラマツの実状について何かしら新たに見聞することができ、また時代の風を感じとることのできた有意義なものであったのではないかと思う。

最後に、講演を快くお引き受け下さった講師ならびに見学をお許し下さった方々に感謝したい。とくに、閑静な住宅街に大型バスにて大勢で押しかけ、プライベートな生活の場を見学させてもらうという無理な要望を聞き入れて下さった江別市の見学先の家主と家族の皆様には、格別の謝意を表します。